

県中教研 社会科部報

第52号

発行所 福島県中学校教育研究会社会科研究部
 発行人 加藤 芳宏
 発行 平成31年3月1日

内容・目次

- 平成31年度以降の研究主題・副主題の解説…………… 2～4
- 県中教研いわき大会を終えて…………… 5
- 県中教研いわき大会に参加して… 5



平成30年度の研究を振り返って

福島県中学校教育研究会社会科専門部長 加藤 芳宏

福島県中学校教育研究会では、本年度より基本主題「主体的・対話的で深い学びを通して生きる力を身に付け、ふくしまの未来を切り拓く生徒の育成」のもと、研究実践が行われています。社会科専門部会においても、本年度より3年間の研究主題を「主体的に社会の形成に参画しようとする態度を育成する社会科の指導はどうすればよいか」とし、研究を進めています。社会的事象に興味・関心をもち、自らの考えを基に他者と協働して、多面的・多角的に考察、構想するという学習活動を通して、よりよい社会の形成に主体的に関わる態度を生徒に育成していきたいと考えています。

研究1年次となる本年度は、研究副主題を「社会的な見方・考え方を働かせ、社会との関わりを実感させる授業の工夫」とし、研究に取り組みました。具体的には、自分と社会を結びつけて考えたり、社会と関わる方法を見いだすことで、学んだことと社会との関わりを実感することができると考え、このような取り組みによって社会の現状や変化を正確に把握する力を育むことをめざしました。

これらの研究についての協議の場となる福島県中学校教育研究協議会いわき大会が、去る10月10日いわき市立植田中学校を会場に県内各地から多くの会員の参加のもと開催されました。いわき支部長の渡邊昌和校長先生を中心に、いわき支部の会員の皆様が事前研究会をはじめ熱心に準備に取り組んでくださいました。いわき支部の会員の皆様、会場を提供してくださいました植田中学校の泉田博巳校長先生をはじめ諸先生方に心より御礼を申し上げます。

研究協議会では、植田中学校の小川郁雄先生、田中邦裕先生、安優枝先生に授業を公開していただきました。いずれの授業も県中教研の研究主題、副主題を受け、「社会参画」、「見方・考え方」、「社会との関わり」を明確にして構築されていました。その中には、「学習内容が、社会との関わりの中で生きて働くものであることを、生徒に感じて欲しいと考えています。」という表現があり、教師として生徒を一番に描いて授業を考えていることが心に染みしました。実際の授業の場面でも、生徒から学習課題の本質に迫る意見や社会参画を意識した意見が多数発表され、参観者からもたいへん参考になったという声が聞かれました。3名の授業者の先生方、本当にありがとうございました。

また、当日いわき支部作成の「社会科の歩み」第49号が配布されました。いわき支部の会員の皆様が、長年にわたって中教研の研究や社会科の授業の充実のために尽力されてきた様子を伺うことができ、本当にうれしくなりました。

さて、次年度は研究2年次となります。研究副主題「社会的な事象について、根拠を基に説明する力を育てる授業の工夫」となります。問題を分析し、社会的な事象に対する自分の意見や考えを根拠を基に論理的に説明する力を育みたいと考えています。ぜひ、各支部におかれましては、授業研究会の開催や研究協議会を工夫するなどして、研究をより充実させていってほしいと願っています。そして、各支部の研究の成果が10月に予定されています福島県中学校教育研究協議会県中県南大会で発表され、県内の会員に伝わり、社会科の授業の充実資することを期待しています。

平成30年度福島県中学校教育研究会社会科研究部組織一覧

部長 加藤 芳宏			副部長 大木 修・家久来 三典・澤崎 俊哉・鈴木 太・渡邊 昌和		
支 部	支部長名	勤務校	支 部	支部長名	勤務校
福 島	加 藤 芳 宏	松 陵 中	北 会 津	佐久間 一 晃	湊 中
伊 達	大 木 修	醸 芳 中	耶 麻	澤 崎 俊 哉	喜多方三中
安 達	鈴 木 豊	大 玉 中	両 沼	星 貴 之	高 田 中
郡 山	家久来 三 典	三 穂 田 中	南 会 津	長 沼 敬 貴	下 郷 中
岩 瀬	八木沼 孝 夫	稲 田 中	相 馬	鈴 木 太	原 町 一 中
石 川	馬 場 哲 明	石 川 中	双 葉	山 田 美由紀	葛 尾 中
田 村	早 川 俊 也	船 引 南 中	い わ き	渡 邊 昌 和	好 間 中
東西しらかわ	西 田 英 実	鮫 川 中			
事務局 総務 幕田 秀明 (附属中)			庶務 樋上 聖 (郡山四中) 会計 小松 拓也 (附属中)		

◇◇お知らせ◇◇

○平成31年度主題研修会

- ・期 日 平成31年5月21日(火)
- ・会 場 郡山市立明健中学校(予定)

○平成31年度県中教研研究協議会県中県南大会

- ・期 日 平成31年10月 9日(水)
- ・会 場 郡山市立郡山第七中学校(予定)

研究主題及び研究副主題の解説

1 研究主題及び研究副主題

研究主題	
主体的に社会の形成に参画しようとする態度を育成する社会科の指導はどうすればよいか	
研究副主題	
平成30年度	「社会的な見方・考え方を働かせ、社会との関わりを実感させる授業の工夫」
平成31年度	「社会的な見方・考え方を働かせ、社会との関わりを実感させる授業の工夫」
平成32年度	「協働的な学びを通して、考えを深めさせる授業の工夫」

2 平成30年度の研究結果

(1) 県大会授業の概要

研究1年次である本年度は、社会の現状や変化を正確に把握するために、多面的・多角的に考察できる資料の工夫や実際の社会との関わりを感じられるような授業づくりに取り組んできた。

本年度の県大会はいわき市立植田中学校を会場に開催され、3名の先生方によって副主題に迫るための授業提案がなされた。

授業者	単元名
小川 郁雄	九州地方(2年地理)
田中 邦裕	武士の台頭と鎌倉幕府(1年歴史)
安 優枝	地方自治と私たち(3年公民)

地理的分野では、九州地方の農業の特色について、稲作を中心に地域を捉える授業を行った。複数の視点から考察し、比較や関連付けができる資料を提示した。それにより社会的な見方・考え方を働かせ、人間と自然環境との相互依存関係に着目させ、生徒の追究意欲を高める授業となった。

歴史的分野では、源頼朝が目指した国づくりについて、複数の資料を提示して多面的・多角的に考察する授業を行った。白水阿弥陀堂と関連づけた既習事項を基に、平安から鎌倉までの時代の推移や比較といった社会的な見方・考え方を働かせた。生徒にとって学ぶ必要性や切実感を感じることができる授業となった。

公民的分野では、いわき市の活性化案を話し合い、キャッチフレーズをつくる授業を行った。KJ法を効果的に用いて、グループで話し合うことで、生徒の社会参画意識を育む授業となった。よりよい社会づくりを目指して、学んだことと実際の社会との関わりを感じられるようなまとめであった。

各分野の授業とも、いわき市の産業や歴史、政策などに関連づけながら、社会との関わりを実感させる工夫が見られた。しかし、協働的な学習によって、課題解決に迫るための学習形態や学習方法についてさらなる研究を続ける必要があるという課題が出された。

(2) 平成30年度研究の成果と課題

①研究の成果

○「社会的な見方・考え方を働かせる」について
導入では、生徒が自ら追究したい、追究すべきだと考える課題設定が、課題追究に有効であると確認された。

展開では、教師が提示する資料を精選することで、生徒は比較したり関連づけたりといった社会的な見方・考え方を働かせ、思考力を高めることができた。また、ICTを活用して、大画面に資料を提示するなど、効果的に授業を進める事例が多く見られ、多面的・多角的に考察することができた。考察したことを伝え合う場面では、ペア、グループ、学級全体と話し合い活動の学習形態を工夫する事例が見られた。

まとめでは、授業で新たに学んだ見方・考え方を働かせて、自分の考えがどのように変化したのか、深まったのかを整理する時間を設ける事例が見られた。

○「社会との関わりを実感させる」について

導入では、生徒の疑問を取り上げた学習課題を設定する事例が見られた。また、地域の身近な課題を設定することで、実生活との結び付きを感じさせることができた。

まとめでは、社会的な見方・考え方を働かせて考察したことを基に、実際の社会との関わりを感じられるまとめにするために、身近な諸事象と関連付けて振り返る事例が見られ、よりよい社会の形成に主体的に関わる意欲を育むことができた。

②研究の課題

●「社会的な見方・考え方を働かせる」について
導入では、学習課題に対する自分の予想や考えをもたせる時間を十分に確保することが必要である。個の考えを整理し、立場や意思を表現することにより、その後の課題追究に迫る際に、自己の変容に気付くことができる。

展開では、考察したことを伝え合う中で比較したり、関連づけたりして自分の考えを練り上げるために、話し合い活動の内容の質を高める必要がある。形式的に場を設定するのではなく、話し合うことで生徒にどのような力を育みたいのかを明確にしなければならない。

まとめでは、これまでの自分の予想や考え、他者の考えなどの学びの過程が分かるノートやワークシートの工夫が必要である。授業後に振り返ったときに自分の考えの変容に気付く授業や単元後の復習に生かされるよう工夫したい。

●「社会との関わりを実感させる」について

導入では、生徒のもっている知識や概念を揺さぶる資料を提示することで、さらに意欲的に課題追究できると考える。

まとめでは、他者との違いや他者の考えの良さに気付いて、発表したり共有したりする場を十分に確保することが必要である。その際、その方法について工夫していきたい。

研究2年次では、上記の成果と課題を踏まえて、副主題「社会的な見方・考え方を働かせ、社会との関わりを実感させる授業の工夫」の研究を進めていく。

3 平成31年度研究副主題の解説

(1) 研究主題との関連

主体的に社会の形成に参画しようとする生徒の育成を目指して本研究を開始した。社会的事象に興味・関心をもち、自らの考えを基に他者と協働して、多面的・多角的に考察、構想(選択・判断)することで、よりよい社会の形成に主体的に関わる態度を育みたいと考え、3年間の副主題を設定した。

【主題・副主題関連図】

主体的に社会の形成に参画しようとする態度



3年間を通して取り組む研究
よりよい社会の形成に主体的に関わる意欲

1年次「社会的な見方・考え方を働かせ、社会との関わりを実感させる」
社会の現状や変化を正確に把握する力

2年次「社会的事象について、根拠を基に説明する力を育てる」
問題を分析し、価値判断する力

3年次「協働的な学びを通して、考えを深めさせる」
よりよい考えや新たな価値を提案する力

(2) 副主題の解説

①「根拠を基に」について

生徒は、社会的な見方・考え方を働かせて課題を追究する過程で、自分の意見や考えを構築する。その際、1つの視点や一時の感情、思いつきでとらえては、社会的事象の本質にせまることは難しい。様々な資料から根拠となる事柄を見つけ、それらを関連付けたり、比較、統合したりして考察することで、より説得力のある意見や考えになる。

課題を追究する際に必要な能力の1つに資料活用能力がある。根拠を基に生徒自身の意見や考えを創る活動を通して、この能力を育成することが重要である。また、資料を自ら作成したり、ICTを活用したりする能力も育成したい。

②根拠を獲得するための資料について

根拠を獲得するための資料の種類と特徴について主なものを確認する。

- 視覚的資料(写真、絵、地図、映像、模型等)
 - ・見やすく全体のイメージをとらえやすい。
- 統計資料(統計表、図、グラフ等)
 - ・年代や項目ごとに比較したり、推移や変化読み取ったりすることができる。
- 実物
 - ・実物には、臨場感があり、その価値を捉えることができる。
- 文献資料(手紙、パンフレット、史料等)
 - ・文書から内容を読み取り、事実認識を深めることができる。
- 調査活動等による資料
 - ・見学や調査などの活動を通して得た資料も、社会認識を深める重要な資料と言える。

資料を提示する際は、社会的な見方・考え方を働かせて追究しやすいように、資料内容を精選したり、元の資料を加工したりするなど、提示の仕方を工夫することが求められる。資料を活用する場合には、出典を明らかにするなど、より信頼性が高いものを扱う必要がある。

③「説明する力」について

根拠を基に自分の意見や考えを他者に効果的に伝えるためには、説明する事柄についての理解をもとに、伝える内容や方法について構想する力が必要になる。その際の視点として大切なことは、相手に分かりやすく伝えること(相手意識)である。相手に伝えることを意識した説明(発表)の方法を、生徒に構想させるようにしたい。

「説明する力」を高めるための主な要素を確認すると、次のようなことがあげられる。

- 自分が伝えたいことを明確にする。
- 相手の反応などを意識しながら話す。
- 何をどの順番で説明するかを意識する。
- 相手の立場や理解度を意識しながら話す。

根拠を基にして説明する力を育むことで、社会の成り立ちや仕組みなどを、深く理解することができる。その中で、自分の意見や考えをもつことで、主体的に社会へ参画しようとする態度を育てたい。

「説明する力」とともに、「聴く力」についても併せて育成を図りたい。説明を単に聞くだけでなく、共感できる点や疑問点を見つけさせるなど、よりよい意見や解決策を互いに創り出そうとする態度を育てたい。

(3)「社会的事象について、根拠を基に説明する力を育てる」ための手だてについて

【課題把握の場面】

- 生徒が興味・関心をもつ教材開発を行い、追究意欲を高める課題を提示する。
- 生徒の既成概念を揺さぶる資料の提示や発問を工夫する。
- 学習課題に対する自分の予想や考えをもたせるなど、課題追究の見通しをもたせる場を設定する。

【課題追究の場面】

- 社会的な見方・考え方を働かせて、生徒の考えが深まるよう教師の発問を精選し、問いの構成を工夫する。
- 多面的・多角的に考察することができるような資料を提示する。
- 互いの考えを説明する際に、関連付けたり比較したりする場やその方法を工夫し、自分の考えの練り直しを設定する。

【まとめの場面】

- 授業を通して何が分かったか、どんなことを考えたかなど生徒が振り返る場を設定する。
- 学習活動や学習内容などについて、振り返る場を設定する。
- 評価規準に基づいた生徒の自己評価や相互評価などの多様な評価方法を工夫する。

これ以外にも、手だてを有効に働かせるために単元全体を見通した系統性のある授業を創造したい。1時間の授業で習得したことを基に、単元ごとにそれらを活用する時間を充実させる時間を確保することが大切である。そうすることで、主体的・対話的な深い学びを実現していきたい。

(4) 授業を構築する際のポイント

実際の授業づくりでは、1年次の成果と課題を基に、以下の内容を意識した授業づくりに努めたい。これ以外でも、目的を達成するために各支部で工夫しながら取り組み、副主題にせまりたい。

【課題把握の場面】

生徒の思考を促し、主体的に追究しようとする意欲を高める課題を設けたい。

- 今までに学んだ知識や概念を揺さぶるような学習課題
- 複数の視点や立場から考察して、意思決定を迫る学習課題
- 地域の身近な課題など、生徒にとって学ぶ必然性や切実感が感じられる学習課題
- 単元を通して追究する学習課題

【課題追究の場面】

根拠を基に説明する力を高めるには、その根拠を獲得するための資料活用（資料を収集、選択、処理、活用することなど）について検討したい。また、考えを説明する際に、話し合い活動が効果的に行えるような学習形態を工夫したい。筋道を立てて論理的に説明することができるような教師のコーディネートも行いたい。生徒が社会的事象を的確にとらえたり、根拠を基に説明したりする学習の質を高めるために、言語だけでなく図や表などを用いて対話することも大切である。

- 資料精選の工夫
 - ・ 複数の視点から考察して、思考・判断することができる資料の作成、提示
 - ・ 今までに学んだ知識や概念を揺さぶる資料の作成、提示
 - ・ 根拠を獲得するために、信頼性、妥当性のある資料の選定
 - ・ 生徒が比較して、類似、推移、相互のつながりなどを見つけることのできる資料の選定
- 根拠を基に説明するために必要な資料の生徒による収集、選択、作成
- ICTを活用した効果的な資料の提示
- 調査活動の工夫

- 学習形態の工夫
 - ・ ペア、グループ、学級全体での考察
 - ・ ロールプレイング等を用いた、特定の立場になりきっての考察
 - ・ ディベートを用いた立場を固定した考察
 - ・ パネルディスカッション等を用いた様々な立場からの考察
- 学習方法の工夫
 - ・ 生徒が思考・判断したことを可視化できるよう工夫をする。
 - ・ 自分の意見や考えの変容や深化、他者の意見や考えとの類似や差異に気づき、論理的に説明する際に生徒が振り返ることのできるノートやワークシートの工夫
 - ・ 付箋紙やホワイトボード等の活用

【まとめの場面】

授業を振り返り、生徒自身がどのように根拠を獲得したか、自分の意見や考えがどのように変化したかを自覚し、説明する力の高まりに気づかせるために、例えば、次のような工夫をしたい。

- 授業の中での振り返りの時間の工夫
- 根拠を明確にして、自分の考えを表現することができるようなまとめの時間の確保
- 学んだことと実際の社会との関わりを感じられるよう、身近な地域や実生活と結びつけたまとめ

4 2年次の研究計画と研究分野

(1) 研究計画

- ① 主題研修会（5月上旬 郡山市内中学校）
- ② 主題研修報告会（5月末日まで 各支部）
 - 主題研修会の報告
 - 支部研究計画の立案
- ③ 支部研究協議会（7月下旬まで 各支部）
 - 研究実践の経過報告
 - 以後の研究の進め方の確認
- ④ 県研究協議会県中・県南大会（10月）
 - 公開授業（郡山市内中学校）
 - 代表支部の研究発表と協議
- ⑤ 県大会報告（10月～11月 各支部）
- ⑥ 研究部報第53号の発行（3月）
 - 本年度研究のまとめ
 - 次年度副主題の解説

(2) 研究分野

- | | |
|-----|-------------------|
| 1年生 | } 各自が地理的分野と歴史的分野の |
| 2年生 | |
| 3年生 | …各自が歴史的分野と公民的分野の |
| | いずれかを選択 |

《参考文献》

「中学校学習指導要領解説社会編」文部科学省 東洋館出版社
 「見方・考え方 社会科編」澤井陽介 加藤寿朗 東洋館出版社
 「社会科重要語句300の基礎知識」森分孝治 片上宗二編集 明治図書
 「中学校新学習指導要領 社会の授業づくり」原田智仁 明治図書
 「世界のエリートが学んできた 自分の考えを伝える力の授業」狩野みき 日本実業出版社
 「一番伝わる説明の順番」田中耕比古 フォレスト出版社

「平成30年度福島県中学校教育研究協議会いわき大会を終えて」

いわき支部長 渡邊 昌和

本年度は、新しい研究主題・副主題が設定された研究の大切な1年目。しかしながら、並み居るベテラン先生方の大量退職・大規模異動のあおりを受け、いわきに戻りたての私に回ってきたいわき大会となりました。授業提供校となった植田中学校も同様で、社会科教員はもちろん校長先生も異動で、大変なご心配をおかけしながらのスタートでした。ただ、幸いにも本市社会科部会理事の先生方には異動が少なく、事務局で手分けしていただきながら諸事万端に準備が進み、なんとか当日を迎えることができました。

授業に関しては、社会科部の昨年までの成果である「単元構造図」を基に構想が進み、理事の先生方を中心に授業者と打合せを重ねながら、単元全体を見通しつつ各時間の重点を精査し、本時の展開を位置づけていく3分野の授業案が着々と準備されていきました。

運営に関しては、支部内理事の減少に伴う役割の精選や、当日ギリギリまで普通授業が行われる日程の中での参加体制・会場設営、中教研の会員減少に伴う問題など、様々な課題が生じ、前例が余り参考にならない状況でした。そんな中、理事の先生方の献身的な運営協力により創意工夫を重ね、会場校の多大なる協力をいただきながら、当日滞りなく会を運営できましたこと、本当に有り難く思っている次第です。

最後になりましたが、植田中学校の授業者の先生はもちろん、会場設営に全面協力いただいた校長先生を始め諸先生方、そしていわき支部理事の先生方、また、指導案検討や運営の相談に全面的にご協力いただいたいわき市教育委員会の大沼俊之指導主事や研究指導員の皆様に改めて御礼を申し上げ、県内各支部代表の先生方による活発なご協議によって本大会が成功裏に終えることができましたこと、ここに心より感謝申し上げます。

「平成30年度福島県中学校教育研究協議会いわき大会に参加して」

柳津町立会津柳津学園中学校 菊地 陽未

県中教研いわき大会では、会場となった植田中学校の先生方やいわき地区の先生方の歓迎のお気持ちを感じ、安心して大会に参加することができました。大変感謝しております。

いわき支部では、今年度の研究副主題に迫るために、「単元の分析と構造化(単元構想図)」を取り入れ、副主題に迫るための「手だて」をどの場面で、どのような学習形態で講ずるのかを明記する取り組み、授業の中で教師がどのように生徒の意見や考えをコーディネートしていくのかの2点に重点をおいて研究が進められていました。私が参加した歴史的分野の公開授業では、「源頼朝が目指した政治とはどんな政治か?」という学習課題に迫るために、生徒達が複数の資料や既習事項を生かしながら、活発に話し合う姿が印象に残りました。

お互いを尊重しながら、意見を言い合える温かな雰囲気を感じるとともに、様々な意見に触れることで生徒の考えがどんどん深まっていく様子を見ることができました。授業を参観させていただき、授業づくりの根幹は学級づくりにあるということを確認しました。

県大会に参加させていただき、各支部の先生方と協議をする中で自分にはなかった考え方や指導法などに触れることができました。今回学んだことを生かしながら、毎日の授業をより充実したものにするために、日々努力をしていきたいと思えます。

各支部代表の参加分科会配当表

		福島	伊達	安達	郡山	岩瀬	石川	田村	し東 ら西 かわ	北 会 津	耶 麻	両 沼	南 会 津	相 馬	双 葉	いわ き
31	地理		○	○	○	○		○			●	○		●		○
	歴史	○		○	○		○		○	●			○	○		●
	公民	●	○			○	○	○	●	○	○	○				

●=発表 ○=参加 □=県大会開催地区